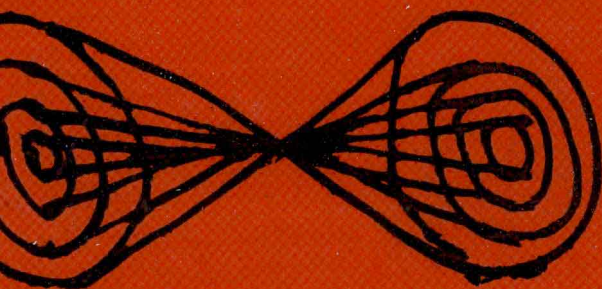


リルケ

世界文學大系

53



リ ル ケ

初期詩集 形象詩集 時禱詩集 新詩集
鎮魂歌 マリアの生涯 ドゥイノの悲歌
オルフォイスに寄せるソネット 後期詩集
フランス語の詩 神さまの話 オーギュスト・
ロダン マルテの手記 随想 ポルトガル文

手 塚 富 雄 編

世界文學大系

53

筑 摩 書 房 版

リ ル ケ

昭和34年3月15日発行

定価 450 円

編 者 手 塚 富 雄

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宣

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話(29)局 7651

目次

初期詩集	神品芳夫他訳	5
形象詩集	神品芳夫他訳	10
時禱詩集	生野幸吉	32
新詩集	高山定一	78
鎮魂歌	高山定一他訳	106
マリアの生涯	国松孝二訳	111
ドゥイノの悲歌	手塚富雄訳	119
オルフォイスに寄せるソネット	高安国世訳	141
後期詩集	富士川英郎他訳	162
フランス語の詩	片山敏彦訳	188
神さまの話	山崎栄治訳	197
オーギュスト・ロダン	手塚富雄訳	249
マルテの手記	生野幸吉訳	291

随 想

風景について

夢の本より

ある出会い

体 験

手 記

思 い 出

人形についてあれこれ

太初之音

若い詩人について

詩人について

若き労働者の手紙

ポルトガル文（リルケ訳）

晩年のリルケ

解 説

年 譜

装 幀 庫 田 發

小 川 正 己 訳	401
星 野 慎 一 訳	403
小 川 正 己 訳	408
星 野 慎 一 訳	410
星 野 慎 一 訳	412
川 村 二 郎 訳	413
小 川 正 己 訳	415
川 村 二 郎 訳	419
川 村 二 郎 訳	422
川 村 二 郎 訳	427
星 野 慎 一 訳	428
水 野 忠 敏 訳	436
ホルトウーゼン 永野 藤 夫 訳	454
手 塚 富 雄	475
	483

リ
ル
ケ

Aber weil hier kein mal ist, und weil
mit schon bar
alles das hierige braucht, das hierige,
seltener und ausgeht. Und, die hierige
jedes, nur ein Mal. ein Mal und
nicht mehr. Und hier auch
ein Mal. Nie wieder. Aber hier ist
ein Mal gegeben zu sein, hier auf nur
irdisch gegeben zu sein, ein Mal:
wieder nicht wieder gegeben.

初期詩集

春

鳥たちが飲むの声をあげる、春のひかりによび覚まされて——
 青い大空はその声でみちみちる。
 皇室公園の古めかしい舞踏場も
 花ですっかりつつまれる。

太陽は 希望をいっぱいにはらんで、
 若草の野に 大文字で 自分の名前を書きつけてゆく。
 ただ あそこの 枯れたしげみの下で
 アポロの石像がひとつ、今もお かなしいため息をつく。

そこへ春のそよ風が寄せてくる。おどりながら
 そよ風は 黄いろの葉むらを吹きはらい、
 あらわになったアポロのひたいに
 青々としたにわとこの花輪をかぶせる。

中部ボヘミヤの風景

波のようにうねるあまたの森の
 翳^{かげ}となった縁^{へり}が 遠くはのかにひかる。
 高い麦の穂の畠^{はたけ}の クリーム色の平面を
 ここかしこに木立^{こだち}があつて
 わずかにさえぎっている。

降りそそぐ光のなか
 馬鈴薯^{じゃがいも}が芽^めぶいている。それから、
 少し先に大麦の畠^{はたけ}、櫟^{もみぢ}の大森林が
 その景色を仕切るところまで。

若葉の森の上たかく
 あかあかと金色に 寺院の塔の十字架がひかる。
 赤針櫟^{あかばねもみぢ}の木立の上に 山番の小屋がそびえ、
 その上に
 大空の円天井^{えんてんじやう}がかかっている。きらきらと青く。

この黄いろのばらの花は

この黄いろのばらの花は
 あゝ男の子が きょうわたしにくれた花、
 きょうわたしは、もらったそのばらを
 いまできたその子の墓へそなえにゆく。

はなびらの上にうかんだ
 きよらかなしずくの玉——ごらん、
 きょうはそれが涙なの、
 きょうは露であつたのに……

夜あけのひかりが東の空を

夜あけのひかりが東の空をふちどつても
輝きを弱めない星があつたら！

そんなたぐい星のことを

ぼくの心は いくたびも ゆめみた。

こんじきの夏の日

ありあまる陽光を飲み疲れたまなこが、

やわらかなその星のきらめきに

しずかな癒しのときをもつ。

そんな星々が ほんとうに この世の営みのうえ

はるかな空に 光を放ちはじめたら、

それは ひめた愛にもえる人への

あらゆる詩人たちへの 聖なるささげものとなるだろう。

それは白菊の咲きほこる

それは 白菊の咲きほこる日だった。

その重厚な壮麗さに ぼくはほとんどおびえていた……

そしてちょうどその日 夜ふけて

お前がやってきた、ぼくの魂をうばうために

ぼくはおびえていた、お前はやさしくそつときた——
ちょうど お前のゆめをみたときだった。
お前がきて、童話めいたしらべのようにひめやかに
夜がひびいた。

彼女のきよらかなたましいが

彼女のきよらかなたましいが

さまざまな夢幻のすがたにあふれるとき、

彼女のまなこをつつむのは

ひかりにみちたおおきなうなばら。

あふれるひかりの重みのために ぼくはふるえる、
部屋のとびらが音もなくひらいて

けんらんたるクリスマス・ツリーがあらわれると

息をのんでたちどまる子供のように。

遠い昔

遠い昔——遠い昔のことです……

いつ？ それさえ 言うことも出来ません……

鐘が鳴り、雲雀がさえずり——

歓喜に胸は高鳴っていました。

若い森のなぞえの上 大空は青くひかり

接骨木の花が咲いていました——

そして ひとりの夏衣裳の少女が すらりと
いぶかしそうに驚きの目をみはって……
遠い昔——遠い昔のことです……

これがぼくのたたかいだ

これがぼくのたたかいだ、
あこがれに身をささげて
毎日をさすらいつつけること、
力づよく 幅ひろく
たくさんの根のすじをたどって
深く人生をつかむこと、
そして苦悩をくぐりつつ
人生を 時間を
超えゆくほどに
熟すること！

母たちの歌

菩提樹^{ぼだいじゆ}から ほのかに
初咲きの匂いがながれて来る。
おおけなくも 夢のなかに われは見る、
みどりの葉のかけに
初めての母の心づかいに
子の下着の縁取り^{えりどり}をする きみの姿を。

ささやかな歌を きみは歌いながら、
その歌は 五月のなかへひびいてゆく。

咲けよ、咲けよ、花の樹よ、
親しき庭の奥ふかく。

咲けよ、咲けよ、花の樹よ、
わが憧憬^{あこがれ}のいとうるわしき夢
われは ここに 待たん。

咲けよ、咲けよ、花の樹よ、
夏こそ きみに 報^{むく}いなん。

咲けよ、咲けよ、花の樹よ、
見よ、われ ここに日のひかり
浴びつつ 縁^{えり}を縁取ると。

咲けよ、咲けよ、花の樹よ、
みのりは やがて訪^きれん。

咲けよ、咲けよ、花の樹よ、
わが憧憬^{あこがれ}のいとうるわしき夢を
われに 教えたまえよ。

ささやかな歌を きみは歌いながら、
きみの歌は 五月そのものなのだ。

花の樹は 花咲くだろう。
あらゆる樹々に先立って。

うららかに きみの縁取りはかがやくだろう。
きみが若き母の心づかいは、

みどりの葉かげに きよらかに
子供の下着を縁取るだろう。

耳をかたむけ

耳をかたむけ 驚きの眼をみはりつつ
ひそやかにあれ、ぼくのもっとも深い生命よ、
風がそっとお前につたえようとすることを
白樺がふるえるよりなお早く、それと知るように。

もしひとたび沈黙が語りかけたら、
お前のあらゆる感覚をもってそれをとらえよ、
どんなかすかな気配にも身をゆだねよ、
するとお前はやさしいゆすぶりをうけるだろう。

そして、わが魂よ、広くなれ、広くなれ、
深い生命が成就するように、
思いにしずむ物たちのうえに
晴着のように お前をひろげよ。

少女らが笑いながら

少女らが笑いながらはいって行く
林の秋についてお前はまだ何も知らない。
ただ時々、遙かな美しい思い出のように

葡萄の香りがお前に触れるばかりだ。――
彼女らは耳を澄ます。そしてその中の一人が
かなしい再会の歌をうたう。

かすかな風に蔓が揺れている、
誰かが別れの合図でもしているように。路ばたには
薔薇という薔薇が物思いに沈んで立っている。
少女らを見る、自分たちの夏が患っているのを、
そして彼の明るい両手が
その成熟した仕事からそっと下ろされたのを。

「マリアへの少女の祈り」から三篇

ごらんなさい、私たちの昼間は

ごらんなさい、私たちの昼間はこんなにも狭く、
夜の部屋は不安です。
私たちはみんな不器用な手を
赤い薔薇の花にさしのべます。

あなたは私たちに優しくなくてはなりません、マリアよ。
私たちはあなたの血から花咲く者です。
そして懂れがどのように痛いかは
あなただけが知っておられます。

この乙女の魂の痛みをこそ

じつにあなたは御自身で知っておられるのです、
クリスマスの雪のようにみずからを感じながら
しかも火のように燃えている魂の……

私たちの心に意味を

私たちの心に意味を

たくさんのもんたちが残していった。

とりわけ 私たちがその意を知っているのは
やさしく、こまやかなもの……

ひめられた庭園や、

まどろみの下にすべりこむ

ビロードの枕や、

私たちをまこつかせるほどの愛情で
いつくしんでくれるものなど。

けれど、多くの言葉は遠くにいる。

言葉たちは 意味から抜け出て、

この世界からはなれて行き、

母マリアよ、あなたの玉座をかこんで、

高まってくる楽音を聞くように

耳をすましているのです。

そしてあなたの御子は

言葉のむれにはほえみかける。

ごらんなさい、あなたの御子を。

祈りのあとで

私は感じます、からだのほてりが

だんだんに増してくるのを、マリアさま、

夜ごと自分が貧しくなり、

そして朝ごとに疲れてゆくのを。

胸しめつける白い絹衣をひき裂くと、

おじけていた私の夢がいちどにさげびます、

ああ あなたの苦しみで私を苦しめて下さい、

ああ あなたと私とを

おなじ奇跡で傷つけてください！

形象詩集

序 詩

君がだれであるにしろ、夕暮にはそとへ出たまえ
 なにもかも知りつくしている自分の部屋をあとにして、
 君の家のうしろには、遠い景色がひらけている、
 君がだれであるにしろ。

家の敷居からそとへ放たれることのほとんどない疲れた眼を
 おもむろにあげて、君はくろぐろとした樹木をたてる。

その一本の樹だけを、ほっそりと、天空にそびえ立たせる。

こうして君は世界をつくった。そのおおきな世界は
 心に秘めたまま熟してゆく一つのことばのようなのだ。

君の意欲がその世界の意味をつかむと、

君の眼は、やさしく、その世界をときはなす。

ある四月から

ふたたび森がかおる。
 ただよいのぼる雲雀が
 重かった冬空をひき揚げれば、ぼくらの肩ははればれ軽い。

枝間にまだうつろな昼の領する冬のなごりの時が過ぎると、
 歩みのおそい午後を雨の降りつくす日が続いたのちに
 あまねく金色の陽ざしのそそぐ
 あの新しい時間がくる。

遠い家々の正面では、それをまばゆげに逃げようと、
 傷ついている窓の
 すべてが、おずおずとはばたきする。

やがて、しずまりかえる。雨さえ音をひそめて、
 しずかに暗さを増しつつ光る敷石の上を渡ってゆく。
 ありとあらゆる物音が、すっかり身をひそめる、
 若枝のみずみずしく輝く蕾のむれに。

恋する女

わたしはあなたにあなたがられています。自分を捨てて、
 みずからの手の支えからも滑りぬけてあなたにむかいます。

ことごとくあなたから来るらしく、

おごそかに、ひたむきに、たえ間なく、

わたしにおし寄せてくるものと

たたかいとおおせるのぞきもないのに。

……かつての頃、わたしは破れを知らぬ一つの世界でありました。
 叫んだり、自分を裏切ったりするものもそこにはなく、
 わたしの静けさは、小川のささやきに
 洗われながらいつも静かな石のようでありました。

そこへこの春がきて、なにかがわたしを
まだ目ざめを知らぬあの未明の年から
次第に切りはなしてしまつたのです。
なにかが わたしのひそかな暖かいのちを
ある人の手にゆだねたのです、昨日までのわたしが
どんなであつたかも知らない人の手に。

静 寂

聞こえるだろう、愛するひとよ、ぼくが手をあげると、
聞こえるだろう、そのけはいが……
孤独な人たちのする身ぶりは、ひとつも洩らすまいと、
たくさん物たちが
じつと耳をそば立てて聞いているのだ。
聞こえるだろう、愛するひとよ、ぼくは瞼を閉じる、
するとそれさえも、あなたにまでけはいがとどく。
聞こえるだろう、愛するひとよ、ぼくはまた瞼をあげる……
……どうしてしかし、あなたはここにいないのだろう。

どんなに小さなぼくの動作も
絹のような静寂の中にはつきり写しとられている。
心のほんのわずかな高ぶりも
張りつめた遠方の幕の上に消しがたく痕をきざむ。
ぼくの呼吸に調子をとって、星々が
あがつたり、沈んだりし、
さまざまな香りが、のどをうるおしに
ぼくの唇に寄せてくる。

遠くはなれた天使たちの
手顔をまでもぼくは見分ける。
それなのにあなただけ、ぼくの想っているあなただけは
ぼくに姿を見せない。

子供のとき

いつ果てるとも知れぬ学校の一日の
ながいながい不安と時のながれるのを
ただ待っているだけ、なにも言わない物たちといっしょに、
ああ ひとりぼっち、運ぶにもあまず時の荷物……
やつと終つて外へ出る。街の火花、街のひびき。
広場の噴水はほとばしり、
そして公園にはいれば、世界は急に大きくなる。
たえ間なくゆききする人々のあいだを、
自分だけひとりちがつて、子供の服着て歩いて行く——
ああ 奇妙なときよ、いたづらな時のながれ、
ああ ひとりぼっち、

あるいは、すべてを遠くながめていること。
通って行く人々、色とりどりの男たち、女たち、
それに子供たち。なんとこの人々は自分とちがつていることだろう。
そこに一軒の家があり、ときおり犬も通りかかると、
不安の合間を縫ってふとあらわれる信頼のおもい、
ああ ゆえなきかなしみ、ゆめ、おそれ、
底知れぬ深み、

あるいは、やわらかに色あせてゆく公園の中で遊ぶこと。
まり投げ、輪投げ、輪ころがし。

ときに夢中でつかもうととび出しては、乱暴に
通りかかる大人たちのわきをかすめる。

だが夕べにはおとなしくなり、棒のような足を

小股に運んで帰って行く、しっかりと手をとられて、

ああ つかもうとするたび逃げてゆく理解、

ああ 不安、重い荷物、

あるいは、何時間ものあいだ大きなうす暗い池のほとりで
小さな帆かけ船を手にもってひざまずく。

ほかの子供たちの、おなじのや、もつとすてきな船が

波紋のあいだを走りまわっているのにみとれて、

自分の船のことは忘れてしまう。そしていつしか

あの小さな青白い顔ばかり思いうかべているのだ。

沈んでゆきながら池の中から

ほのかに光を放っていたあの顔……

ああ 子供のときよ、手から滑りぬけてゆく譬喩のむれ、

どこへ、どこへ行く、

子供時代の一景

暮色の深まりが 豊かな宝のような

その部屋に、少年は坐っていた、だれにも知られず。

夢の中のできごとのように 母親が入ってくると、

ひっそりとした戸棚の中で コップがふるえた。

自分のけはいを部屋がつたえるのを感じて、母親は

少年にくちづけした。「お前、ここに居たの……」
それからふたりは不安なまなざしをピアノに向けた。
夕べときおり母が奏でるうたのしらべに
少年は奇妙に深くひきこまれてしまうのだった。

少年はひっそりと坐っていた。そのつづらなまなざしは
弾いている母の手についてはなれぬ。

その手は 指輪の重みに背を曲げて

雪の吹きだまりのなかを重い足どりで歩むように、
白い鍵盤の上を行く。

お守りのうた

だれかを寝かしつけてあげたい、

だれかのそばに坐っていてあげたい。

あなたを揺すぶり、歌って子供のように寝かせてあげよう。

眠りに入るにも、眠りから出てくるにも
わたしがついていてあげよう。

「ゆうべは寒かった」ということを知っているのは

この家の中でわたしひとりであればいい。

うちに、そとに、耳をすましていよう。

あなたの息に聞き入り、おもてに、森の物音に耳を向けよう。

家じゅうの時計がたがい呼びあうように時を打つ。

そんなとき、時のながれの底がみえる。

そとの路にはまだよその人が通って行く。

そしてどこかの犬をさがせる。

そのうしろで 静寂がうまれる。わたしは

つぶらに見開いた眼をあなたの上に据えてみた。
 暗やみの中で何か動くものがあるたび、
 その眼はあなたをやわらかにつつみ、そして放す。

夜の人々

夜は人のつどいにふさわしいものではない。
 夜こそはお前を隣人から分けへだててくれるのだ。
 だから、それでもなお隣人をもとめようとしてはならない。
 人の顔を見るために
 夜、お前の部屋にあかりをとすときには、
 だれの顔かと、よく考えてみなくては。

光がしたたるほど顔をぬらして、
 人の形相はおそろしくゆがめられている。
 夜に、親しい仲間のあつまりをしても、
 人間が入りみだれ重なり合って
 危うげな世界がうまれるだけだ。
 人々のひたいには黄色い輝きが照らし、
 あらゆる深い想いを追いはらってしまっている。
 まなざしの中には酒の気もえさかり、
 両手には重い手ぶりがつきまとう。
 話を交わすとき人々は手ぶりをまじえて
 たがいによりやう理解し合う。
 そしてそのとき人々は言う、「わたしは、わたしは」と。
 だがそれはだれと置き換えてもかわらぬ「わたし」だ。

夜のヴァイオリン

だれ弾くと知れぬヴァイオリン、お前はぼくを追ってくるのか。
 行く先々の遠い都市で、お前のさびしい夜のしらべが
 孤独なぼくの夜にいくたび語りかけてきたことか。
 何百もの手がお前を奏でているのか、それとも一人か。
 どこの大きな都会にも、お前のしらべを耳にして
 河の中に身を消そうとの思いからのがれ救われた人々が
 かならずいるものなのであるうか。
 なぜいつも、その音はぼくにつきまといてくるのだろう。

どうしてぼくは、おびえつつお前をうたわせる弾き手たちの
 そばにいつも居合わせるのだろう、
 人生は、物という物の重みをことごとくあつめたよりも
 もっと重いと、お前に語らせる弾き手たちの。

カルセル橋

橋の上に立つ盲目の男、名もなき国と国との
 境界石のように灰色のすがたして。
 彼はつねに不変のもの、おそらく彼を軸に
 遠くから星の時間がめぐり動いているのであろう。
 あるいは、あらゆる星座のものしずかな中心点であるかも知れぬ。

なぜなら、彼のまわりのすべてのものは、さまよい、ながれ、
 綺羅をきそっているばかりだ。

多くの入りみだれた道の中に据えられている
 彼は動ずることのない正義の男、
 表面のみに生きる人種とものかたわらに立つ
 冥府へのくらしい入口だ。

嘆 ぎ

ああ すべてはかなたに遠く、
 はるか昔に消え失せてしまった。

ぼくがいま光を受けているあの星は
 幾千年も前に

死滅しているのではないか。

通り過ぎて行く船の中で

なにかおびえた声のするのを

耳にしたような気がする。

家の中で一つの時計が

時を打った……

どの家でだろう……

そうだ、ぼくは自分の心から抜け出て

広い大空の下へ歩んで行きたい。

祈りたい。

すべての星のうち一つだけは

まだほんとうに存在しているにちがいない。

ひとり存在をたもっているのがどの星か、

ぼくにはわかるような気がする。

それは空の奥深く

光のすじを辿って行ったその果てに

ひとつの白い都市のごとくに立っている……

孤 独

孤独は雨のよう、

それは海から夕暮の大気に立ちのぼる。

遠く人里はなれた広野から

いつも孤独を湛えた空へかえって行く、

そして空から街に降る。

街路のすべてが朝に向かう薄明の時刻に

孤独は雨となって降る。

むなしくもとめ合ったからだとかからだが

幻滅にうちひしがれて離れるとき、

憎みあっている人と人が

ひとつベッドに眠らねばならぬとき、

そんなとき、孤独は河となって流れて行く。

秋 日

主よ 時です まことに夏は偉大でした